

# 浅草喜劇人銘々伝

8

西条 昇

江戸川大学教授・喜劇史研究者

## 第二次「カジノ・フォーリー」篇①

「今度は君が中心になってやってくれないか」

第二次「カジノ・フォーリー」の経営者となった内海行貴にそう口説かれたエノケン（榎本健一）は第一次カジノ組から脚本も書ける中村是好、踊り手で振付師の間野玉三郎と堀井英一に声をかけ、給料も含めて何でも四人平等にやっつけようとした。役者では木村時子の書生だった城山敏夫、新派や剣劇の一座にいた佐藤久雄、五九郎門下の武智（当時は河村）豊子らが新たに参加。昭和4年10月28日に第二次カジノの第1回公演が開幕した。

洋画を学ぶため川端画学校に通っていた菊谷栄はのちに榎本の右腕と言わばレヴュー作家となるのだが、第2回公演で初めて榎本の舞台を観ている。レヴュー『サーカス一座』でピエロ役の榎本は団長役の中村との小奇術の場面でいちいちヘマをやって笑わせ、平舞台の上で綱渡りの身

アイドル的な人気者となっていく。

旗揚げから1ヶ月半ほどは客足の悪い日も少なくなかったものの、12月半ばから突如、大入り満員の盛況が続いた。浅草公園に集まる不良少女たちの生態を描いた川端康成の小説『浅草紅団』の東京朝日新聞夕刊での連載が12月12日から始まり、カジノ・フォーリーのことが取り上げられたのだ。

〈エロチシズムと、ナンセンスと、スパイドと、時事漫画風なユウモアと、ジャズ・ソングと、女の足と——〉

ハッピー姿の花鳥と梅園がお下げ髪を揺らしながら「深川かっぱれ」を踊る場面が出てくるが、これは12月14日からの第5回公演の〈ヴァラエテイ〉で実際に踊られたものである。川端の描写にそそ



第二次カジノ・フォーリーの舞台から、素足を見せた若い踊り子たちの中央左が榎本健一、右が中村是好。

振りをして最後に綱からすべり落ちるパントマイムで観客を爆笑させたという。また、病気で倒れたヒロインの代役として榎本のピエロがバレエ衣裳で娘役に扮し、二枚目の間野とタンゴを踊る場面について菊谷は「このダンスの面白さ、可笑さはすでに天下一品と称してもよかつたろう」と書いている（『エノケンと僕』）。残されているこの場面の写真を見ると、バレエのアラベスクのようなエノケンのポーズがピタリと決まっていた。

四人が平等の体制とは言え、榎本のキレの良いドタバタ演技がカジノの魅力の大きな部分を占めていたことは間違いない。

女優・踊り子も、サトウハチローが「古いがんどき」と評した第一次カジノの時と違って、まだ十代半ば前後の少女たちが揃い、ストッキングを履かずに健康的な素足のままで踊ってみせた。第一次組で直前に榎本夫人となった花鳥喜世子が19歳、日本舞踊の梅園流家元の孫娘である梅園龍子は第二次カジノ旗揚げ時に14歳の美少女で、やがて

のかされた若いインテリたちがこぞってカジノに詰めかけるようになった。

カジノ側もこの絶好の機会を逃すまいと、12月30日からの第6回公演のプログラムに、カジノが描かれた回の紙面の切り抜きを掲載してみせた。更に、榎本とは「根岸大歌劇団」時代からの仲間でありレコードのヒットで流行歌手となっていた二村定一をこの回に出演させたほか、「女の足と——」の部分に期待して集まった客に向けて、レヴュー『美脚展覧会』では黒幕の下から少女たちの腿から下だけを見せる場面を作っている。

※34ページの写真も併せてお楽しみ下さい。



第二次カジノ第2回公演のレヴュー『サーカス一座』で女装して踊るピエロ役の榎本健一（右）と振付も兼ねた間野玉三郎（左）。

# 西条昇の浅草喜劇コレクション 第二次「カジノ・フォーリー」篇①

西条昇の所蔵資料の一部を本文ページ (P12-13) と併せてお楽しみ下さい。



昭和4年11月18日からの第二次カジノ・フォーリー第3回公演プログラム。座長格のエノケンが2本のレビューとナンセンススケッチで笑わせた。



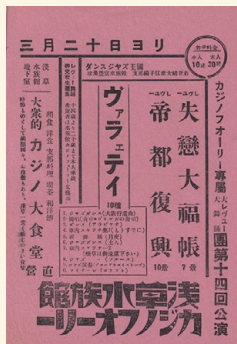
昭和4年12月30日からの第二次カジノ第6回公演プログラム。川端康成の朝日新聞連載小説『浅草紅団』のカジノを描いた回が掲載されている。



昭和5年3月31日からの第二次カジノ第15回公演プログラム。ビエール・アンリ・カミ原作『世界珍探検』をレビュー化して上演した。



昭和5年4月30日からの第二次カジノ第18回公演プログラム。レビュー『ドンキー座』には流行歌手の二村定一が第6回公演に続き出演した。



昭和5年3月20日からの第二次カジノ第14回公演のチラシ。レビュー『失戀大福帳』はサトウハチローの原作である。



第二次カジノを描いた川端康成『浅草紅団』の単行本(先進社 昭和5年12月5日発行)の復刻版(日本近代文学館)の表紙。

**西条 昇** 江戸川大学教授、喜劇史研究者。

昭和39年、東京・飯田橋生まれ。幼少期より浅草をはじめとする都内の劇場や寄席で喜劇と演芸を観て育つ。新聞・雑誌への連載やTV・ラジオ出演も多数。主な著書に『ニッポンの爆笑王100』『笑伝・三波伸介』など。

